

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 89 号 平成 30 年 7 月 20 日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



須磨寺『青葉の笛』音楽碑



須磨寺「源平の庭」

平敦盛（左）と熊谷次郎直実（右）像

唱歌『青葉の笛』

一ノ谷の合戦において、熊谷次郎直実くまがひじろうとの一騎討ちによって討ち取られた平敦盛の最期の姿を語る「敦盛最期」は、『平家物語』の中でも特に有名なエピソードです。

美しい若武者敦盛は討たれた時に腰に錦の袋に入った笛を差しており、討ち取った後に笛に気づいた直実は風雅な敦盛の心に涙を流しました。

この場面は謡曲や浄瑠璃、歌舞伎などさまざまな形で伝えられ広められていきました。

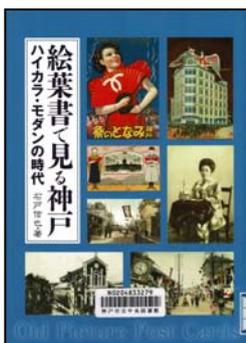
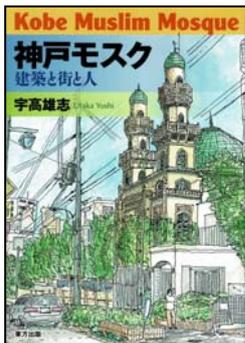
そして明治になると、唱歌『青葉の笛』が作られます。詞を書いたのは『鉄道唱歌』を作詞した大和田建樹たけき、曲を作ったのは『キンタロウ』『うらしまたろう』の作曲で知られる田村虎蔵。一番では平敦盛、二番は平忠度の最期が歌われており、明治三十九年の『尋常小学唱歌』掲載時には『敦盛と忠度』という題だったそうです。

敦盛ゆかりの「青葉の笛」が展示されている須磨寺には、この歌の歌詞と楽譜が刻まれた音楽碑があります。隣には曲を演奏できるモニュメントがあり、敦盛を偲ぶ旋律を聴くことができます。

神戸モスク―建築と街と人 宇高雄志 (東方出版)

異人館街の近く、中央区中山手通にある神戸ムスリムモスクは、昭和十年に竣工した。当時、洋館が建ち並ぶ界限においても、屋根の上に大きなドームと二つのミニレット(塔)を持つモスクは目を引く存在であった。

日本最古で現存する神戸ムスリムモスクの設計・施工に携わった人々やその背景。設計当時の図面と現況との相違点など建築物としてのモスクの検証。そして、戦災や震災を共に経験した人々の宗教を越えた関わりが、約八十年の神戸モスクの歴史を中心に記されている。



絵葉書で見る神戸―ハイカラ・モダンの時代 石戸信也 (神戸新聞総合出版センター)

開港一五〇年を記念し、著者の五千点を超えるコレクションから、明治と昭和の神戸の絵葉書を紹介。風景や観光だけでなく、学校行事、スポーツ大会、企業、ビルの竣工など、様々な目的で発行されてきた絵葉書は、町の歴史と人々の暮らしの貴重な記録である。各葉に添えられた短い説明文が要点を突き、図柄をより深く楽しませる。写真館と写真師、商館ラベルなど、コラム欄も興味深い。

読むパンダ 黒柳徹子選 日本ペンクラブ編 (白水社)

小説家、キャラクターデザイナー、映画監督、パンダウォッチャーなど各界のパンダ愛好家と歴代飼育員によるエッセイ集。

元上野動物園飼育員の話では、日本で初めてパンダを迎えたときの興奮と驚きが伝わってくる。それから四十五年間、試行錯誤しながらの日本のパンダ飼育の歴史がまとめられ、謎の多い生態や赤ちゃんパンダ誕生秘話が明かされる。もちろん王子動物園の話も収録。

ひょうごの庭園―図絵で読み解く 西桂 三谷景一郎画 (神戸新聞総合出版センター)

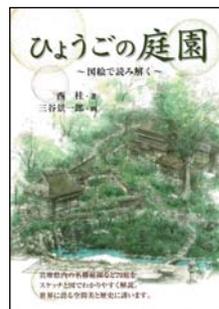
兵庫県内の日本庭園七十九ヶ所を、スケッチ・図・写真を使い、平面図に番号を付して解説する。

神戸市内では十四の庭を紹介。「須磨離宮公園」として知られる「旧武庫離宮庭苑」は、かつて明治天皇の別荘地だった。元神戸市長小寺謙吉の本邸でもあった「相楽園」は戦災で主な建物が焼失、現在では旧ハッサム邸などの移築により異国の雰囲気漂わせる。庭園文化が身近になる一冊。

兵庫県の鉄道―昭和と平成の全路線 野沢敬次 (アルファベータブックス)

明治七年五月に大阪と神戸間に関西初の鉄道が開業した。その後、兵庫県内各地にも鉄道が次々と敷設されていった。

本書は、県内を通る各路線の歴史を、主に昭和期に撮影された懐かしい写真とともに振り返る。現役路線を取り上げた「国鉄・JR」「私鉄・公営鉄道」の章の他、淡路島の鉄道線や姫路市営モノレールといった廃止路線も全て掲載されている。



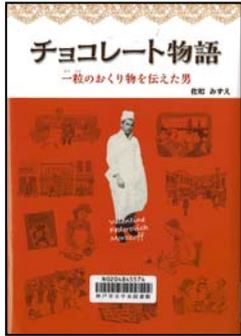
バー「サンボア」の百年 新谷尚人 (白水社)

「サンボア」は大正七年、神戸花隈で始まり、現在、京都・大阪・東京に店舗を持つ。かつて、谷崎潤一郎、古川ロッパにも愛されたというバーの名店である。

著者は北新地サンボアを開いた人で、過去の案内状、企業誌、聞き取り、記憶などをもとに歴史を遡っている。創業者・岡西繁一についての記録は少なく、開業から昭和時代を知る人が減っていく中、本書をまとめたのは、新たな情報が寄せられるのを願ったこと。著者が薫陶を受けた店長やお客様方への敬意、「サンボア」を名乗ることへの誇りが伝わってくる。

チョコレート物語―一粒のおくり物を伝えた男 佐和みずえ（くもん出版）

チョコレート菓子で知られる「モロゾフ」の名を世に広めた男とその家族の物語。男の名はワレントン（通称ワリーヤ）という。モロゾフ一家は、ロシア革命を逃れ、大正の終わりに神戸でチョコレート店を開く。チョコレートを溶かす日本の猛暑、経営をめぐる日本人協力者との決別など、幾多の困難を乗り越え、ワリーヤはチョコレート作りに生涯をかける。亡命直前に食べたチョコレートが忘れられなかった彼は、みんなを幸せな気持ちにするチョコレートを作り、多くの人に届け続けた。小学生向け。



阪神間から伝えたい―人・まち・文化 阪神文化交流会編集・発行

阪神文化交流会は、生涯学習と人々の交流を目的に発足した。本書は『阪神間からの贈りもの』に次ぐ第二弾にあたる。

日本画家や音楽太夫など各分野の専門家を迎えた講演の記録と、会員の随想が収録されている。

随想のテーマは、昭和三十六年の神戸の豪雨災害の記憶や趣味で始めたピアノについてなど様々で、会員たちの多彩な活動を覗くことができる。

たべもの九十九 高山なおみ（平凡社）

料理や食についての著作、テレビ出演など、幅広い活躍をする著者の最新エッセイ。五十音順に並ぶ四十三の話題は多種多様だが、けんちん汁やコロッケなどでは母祖母との思い出がにじみ出る。また二年前から神戸で一人暮らしを始めたため、「そばめし」などローカルな話題も顔を覗かせる。近年は絵本も手掛ける著者。相棒である絵本画家に習ったという自身の挿絵も魅力的。

II その他の新刊 II

神戸とコーヒー 神戸新聞総合出版センター編集・発行
お布団はタイムマシーン 木皿食堂3
木皿泉（双葉社）

恐ろしき四月馬鹿 横溝正史ミステリ
短篇コレクション1 日下三蔵編（柏書房）
さなえさんのてー神戸空襲とわたしの人生 石野早苗 小城智子 杉本安希絵（神戸平和マップをつくる会）

ジョーイ・エブラハム Joey Abraham

箴 讓衛 えびら・じょうえ

明治 29 年(1896) ~ 昭和 49 年(1974)



神戸 その 13
あんな人こんな人

ジョーイ・エブラハムは、神戸市中央区の中山手生まれで、神戸のミッションスクールを経て、10歳のころ母国イギリスに留学します。ラグビーやクリケットなど本場仕込みの技とスポーツマン精神を身につけ、大正3年(1914)に帰国。休む暇もなく父が居留地に興した貿易会社エブラハム商会に参加しました。

運動神経抜群の彼は神戸レガッタ&アスレチッククラブに所属し、ラグビーで華々しく活躍します。大正11年(1922)には、英国皇太子が訪日した際に実現したプリンス・マッチにも出場。選手引退後もコーチの草分けとして関西の学生の指導にあたり、神戸一中対二中の定期戦をはじめ、長く審判も務めるなど、神戸でのラグビーの発展に寄与しました。昭和14年(1939)に帰化した彼は日本名を箴讓衛と名乗り、おしゃれな紳士としても有名で、神戸を愛し神戸に愛された人物と言えるでしょう。



参考：『神戸スポーツはじめ物語』高木應光（神戸新聞総合出版センター2006）

写真・参考：『神戸っ子』36号、129号、131号（月刊「神戸っ子」編集室）

ランダム・ウォーク・

イン・コウベ

89

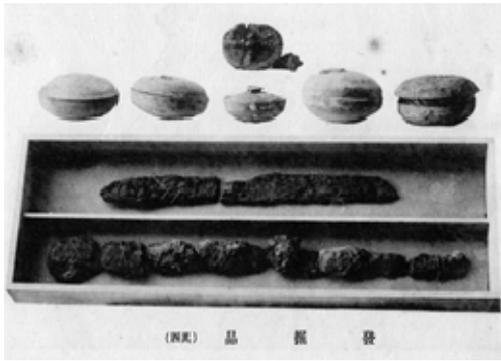
中宮古墳と『古墳址記』

神戸市中央区山本通五丁目、相楽園から西へ五分ほど歩いたところに、「古墳碑」と刻された石碑があります。これは、大正時代に建てられたもので、自宅の敷地内にあった古墳をとりつぶすことになった際、当時の土地の所有者であった山口力氏が、その消失を惜しみ、記念として建てたものです。



大正十五年発行の『古墳址記』は、山口氏が編んだもので、漢文で刻まれた碑文の内容、発掘前の古墳の写真、古墳調査の経緯などが収録されています。古墳は中宮古墳と呼ばれるもので、このあたりがかつて中宮と呼ばれる村であったところから来ています。玄室長五・三m、幅二mと記録されています。古墳からは、

金銅装十字文楯円形透彫鏡板付轡や刀・鉾・鉄鏃、耳環・須恵器が出土しており、遺物は多種に及んでいますが、石室は包丁型で、羨道の延長線上にあるとの記載から、片袖式石室で、埋葬場所が袖部ではないことが分かります。馬具や須恵器などから見て、六世紀中ごろの古墳と考えられます。玄室長五mを越える規模は、大型石室といつてよく、この地域の盟主墳のひとつと考えてよいものです。



発掘品写真（『古墳址記』より）

この古墳から出土した発掘品は、京都の半井氏に預けられ、考察を依頼されました。半井氏というのは、京都府寺社係の半井真澄のことで、京都府鹿谷古墳の遺物出土の際、絵

師遠藤茂平を伴い、いち早く調査を行なった人物です。歴史に造詣が深く、日本考古学の父ともいわれるウィリアム・ゴランドとも面識があったといえます。中宮古墳の遺物を調査するため、当時京都帝国大学の梅原未治が半井氏のもとを尋ねています。後に、梅原氏は京都の鹿谷古墳について、絵図面を東京帝国博物館から取り寄せて、論文を書くことになりましたが、その絵図面製作者・半井氏にこの時に出会っていたことになるわけです。中宮古墳の遺物を調べた梅原氏は「神戸中宮古墳とその遺物」という一文を記しています（『古墳址記』所収）。梅原氏の目に触れた中宮古墳の須恵器はその後、大正十一年に、台付き壺ほか五点が、京都帝国大学に寄贈されました。

『古墳址記』の文中には、近くに黄金塚古墳があると記載されています。この古墳は現存しており、昭和六十三年には発掘調査も行われています。実際『神戸市史附図』にある「武庫地方遺物遺跡分布図」には、多数の遺跡が六甲山南麓にあるとされており、多くの古墳があったことが示されています。しかしながら、

神戸開港以来、市の発展につれて、その多くが消えていきました。市街地化により、かつて古墳があったことは、ほとんど分からなくなっています。『古墳址記』に記された調査記録は、神戸市の六甲南麓における古墳調査としては、早い時期の事例として貴重なものです。古墳の場所を示す石碑は、往時に古墳があったことを示す証人として、今もその場所にひっそりとたたずんでいます。



「中宮村古塚」『神戸覧古』若林秀岳（明治34年）
貴重資料デジタルアーカイブズより

参考文献

- 『古墳址記』山口力編集・発行
- 『神戸市史附図』（神戸市）
- 『ガウランド 日本考古学の父』（朝日新聞社）